



第12回東北アジア（日中韓）青年フォーラム開催

長野 清志

8月23日から24日まで開催された日韓の学生のダイアログに引き続き、8月24日から29日まで、韓国政府の支援と韓国MRA/ICの主催により「東北アジアの発展のための平和と協力」のテーマの下に、第12回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが開催されました。今回はMERSの影響を受け日本からの参加者は定員を下回ってしまいましたが、韓国に交換留学中の大学生4名を含む、9大学からの10名、又、12歳まで中国で過ごした高校3年生の山口琳令さんの特別参加、更には日本で学ぶ中国からの留学生1名という総勢12名が日本チームとして参加しました。又、弊協会の高橋衛副会長他2名の理事も参加しました。中国からは、韓国や日本へ留学中の学生を含めた26名が、そしてホスト国韓国からは、40名余りが参加しました。昼間のディスカッションに加え、夜遅くからの自主的なミーティングでも歴史問題を始め、お互いに考えていたこと、感じていたことを率直に話し合い、参加者同士に深い友情が築かれました。又、独立記念館や国立博物館等への訪問に加え、北朝鮮との非武装地帯にある板門店の第三トンネルの見学が予定されていましたが、韓国と北朝鮮の緊迫した状況下、その訪問が中止となるなど、現在、韓国の置かれた厳しい政治状況にも直面しました。日本の参加者の感想を一部紹介します。

“日中韓の将来を共に良くしたい”という共通の願い

漢陽大学4年 小田 世秀亜

私は日本人の父親と韓国人の母親を持つ日韓ハーフとして、昔から日韓の関係について考えることはあった。現在はソウルで漢陽大学に留学し、留学をスタートさせた時からより深く考えるようにもなった。留学生活を通してたくさんの中国人の友達とも仲良くなり、私個人としては韓国や中国を理解していると思っていた。私が漢陽大学で知り合った友人と日韓の問題について話し合うことも多々あり、正直今回のフォーラムは私にとってさほど特別な経験にならないのではないかと、思っていた。しかしこのフォーラムはそんな私にとっても大変有意義で忘れられない経験となった。・・・メインの日程には様々な形式・主題の討論が含まれていて、終始大変良い雰囲気の中で意義深い意見交換をすることが出来たと思う。しかし最も心に残っているのはそのメインの日程の前後に楽しんだ交流であった。討論の時間の外で、日中韓それぞれのメンバーと遊んだり、少しのお酒を楽しんだりしながら、驚くほど速く仲を深めることが出来た。これはこのフォーラムが一週間というある程度の長い期間と、参加者全員に“日中韓の将来を共に良くしたい”という同じ願いがあったからだと思う。留学している学校の友達と仲良くなる時とは、ここが決定的に違っていると思った。学校で会う友人は、特に日本に対して悪い感情は持っていないくとも、共に日中韓の将来を良くしたいという願いまでは持っていない人がほとんどだからだ。私は今回ソウル在住日本人留学生として日本チームに入ったが、韓国語が出来る日本人として他の日本人参加者よりも一層韓国人チームと仲良くなれた気がする。・・・やはり交流において大きなポイントとなるのは言語であると再認識させられた。卒業・就活の後に少しでも余裕が出来たら、中国語も学んでみたいと思う。フォーラム全体を通して、これからずっと仲良くしていきたいと思えるたくさんの仲間に出会えたことが本当にかけがえのない収穫であった。最後の共同宣言文に願いを込めて終わったが、いつかその願いが叶う日が来ると信じているし、その願いを我々の努力をもって叶えていかなければならないと思う。私は少しでもその力になれるようなフィールドで、社会人として働いていきたい。



生涯の友人ができたフォーラム

慶応義塾大学総合政策学部2年 梶田 祐奈

国立博物館見学の際には、韓国の学生が私達日本人学生に対して、韓国の歴史をわかりやすく教えてくれ、逆に私達は日本の歴史を教え、お互いがお互いに学びを深める機会を持つことができた。最初は日中韓の間にはさまざまな歴史問題が存在するため、一緒に博物館を見て回るのは大丈夫だろうか心配をしていたが、そんな心配は一切必要なかったように思われる。お互いがお互いに教えようとする心を持ち、知ろうとする心を持つことが大切なのではないかと感じた。

私がこのフォーラムに応募したきっかけである「韓国や中国に生涯の友人ができるはず」という言葉。まさに私はその言葉通りに生涯付き合いたいと思える友人ができた。彼女とはいつどうしてどのように親しくなったのかお互いに明確には覚えていないが、本当に親しくなるということはいつの間にか自分たちも知らない間に親しくなっているということだと思う。フォーラム期間中にも一緒にごはんを食べたり、夜まで部屋で話をしたり、そんな些細な時間でさえも大切に思えた。わたしが日本に帰国した今でもお互いに連絡を取り合っている。

私が1週間過ごした中で一番印象に残っている言葉がある。「今まで自分の国にしか興味がなかったけど、あなたに出会って日本に興味を持った。日本に行ってみたくと思った」「あなたと仲良くなってもっと仲良くなりたい、もっと日本を知りたいと思うから日本語教室に通おうと思う」このような言葉だ。私はこの言葉を聞いた時、心から嬉しかった。また、自分が日本を背負う日本人として、相手にこのような影響を与えることができたことは複雑な日中韓関係を持つ3カ国に対して貢献することができたのではないかと考える。

～明るい未来に向けて～

首都大学東京3年 日比谷 佳乃

私は現在韓国に留学しているが、留学中に必ず日中韓3ヶ国で集まり、歴史問題を含めて未来を考える真剣な討論をしたかった。その目的を叶えたものがこのフォーラムであった。・・・このフォーラムは今まで私が参加したものは明らかに違った出会いであった。どんな国際交流プログラムよりも質が高く、また出会いだけでは終わらない大切なものを得た。それは「東北アジアの未来を考える日中韓の青年に出会えた」こと。この1週間、参加した1人1人が真剣に東北アジアの未来を考え、何も隠さず、腹を割って討論した。感情的になり、涙を流す人もいたが、みんなそれだけ真剣だった。特にNIGHT MEETINGは任意ではありながら、日中韓どの国も多く参加者がいた。そこでは普段は聞くことが出来ないようなシビアな政治問題に触れた討論をした。「お互いの国の印象」、「アメリカの存在」、「慰安婦」、「竹島（独島）は韓国のものと言っただけで反日感情なのか」、「各国で受けた不快な出来事」、「北朝鮮と中国の関係」。

国が違えば、受けてきた教育はもちろんのこと、流れるニュースも異なる。竹島（独島）の領土問題を例にとると、ある韓国の女の子がこんなことを言っていた。「韓国人みな独島は韓国のものと思っている。だからといって、これを反日感情ととらえるのはおかしい。私はどんな韓国人相手にも日本が大好きと自信を持って言える」と。

私も彼女と同じようにどんな人に対しても、韓国も中国も大好きと自信を持って言える。確かに、国家間の問題は山積みだけど、このフォーラムを通して、私には確かな東北アジアの明るい未来が見えた。

韓国訪問を通して考えたこと

中山 啓介

私はこの夏の8月23日・24日、「韓国MRA/IC」からの呼びかけに応じて開かれた「日韓ダイアログ」という催しに出席するため韓国を訪問した。以前に一度韓国を訪問したことはあるが、実質的には初訪問に近い。訪問目的は、「日韓両国の和解と協力を通しての関係改善」というまことに重いものであった。

特に今年は日韓外交正常化50周年を記念し、両国の大学生達が近年の歴史だけではなく、朝鮮通信使のような歴史的事実をも継ぎながら未来志向的な協力関係を構築することが謳われた。このダイアログを通し、また発表会に於けるフロアとの対話を通じて産み出されたものは、両国の関係改善と東北アジアの平和に寄与しよう、という両国の青年達の高い理想と堅い決意を伴いつつ、かつまたシニアの人達をも巻き込んだ明るく勇んだ雰囲気のものであった。

今回日本からは、国際IC日本協会の高橋衛副会長はじめ理事・会員10名が参加し、それにIC国会議員連盟のメンバーである白真勳議員が特別参加した。韓国側は、MRA/IC韓国本部の車光善総裁や国会議員連帯の李柱榮氏（セヌリ党議員でセウォル号沈没事故の後始末で陣頭指揮を執った前海運水産相）らをはじめ理事並びに委員の方々13名が参加した。我々は約3時間半胸襟を開いて体験を語り合った。50年近く前の青年時代の体験をはじめ、最近MRA/ICの思想に触れて体験した道徳的覚醒のことや家庭内での人間関係の変化の体験等を語り合う中で、お互いに急速に硬さが融け、両者の距離が縮まったことが実感できた。

韓国MRA/ICメンバーである国会議員からは、戦後ドイツとフランスが和解できたように、今日の韓日両国間での信頼を築くための打開策を、両国それぞれの指導者らにも、さらなる働きかけが、いまこそ望まれている。との声が上がった。

その後の食事でさらさらにその信頼関係は膨らみ、その後の一連の会議や翌日の国会議長訪問でもその喜びはさらに続いた。日韓は最も近い隣国同士であり、新たな50年の第一歩がこのような形で確実に形成され、その場に居合わせることが出来たのは、個人的にも大きな喜びであった。また、それは次世代に託す新たな希望となりうるものであった。

繰り返しになるが、今年は日韓国交回復50年の節目の年でもあり、「千里の道も一歩から」の譬えの如く、「民間の我々に出来る事ことが何かあるのではないか」「民間の我々だからこそ出来る何かが案外身近なところに眠っているのではないのか」と考え、参加を決意したわけであるが、今回の実体験を通してそれを確信できたのは大きな収穫であった。

